

## 詩篇73篇 「信仰の歩みが滑りそうな時」

### 1A 聖所に入る前 1-16

1B 慈しみ深い神 1

2B 悪者の栄え 2-12

3B 空しい心の清め 13-16

### 2A 聖所に入った後 17-28

1B 瞬く間の滅び 17-20

2B 右手で支える主 21-26

3B 主の近くにいる幸せ 27-28

## 本文

詩篇 73 篇を開いてください。私たちは、午後の礼拝で 71 篇から 74 篇までを一節ずつ学びますが、今朝は 73 篇に注目します。73 篇は、私たちが信仰生活を歩む上で、絶えず晒されている誘惑を、正直にそのまま取り扱っています。書いた人はアサフです。礼拝賛美を導く人でした。その人が、「私の歩みは、すべるばかりだった。(2 節)」と正直な告白をしています。人々の前に立って、礼拝を導いたり、指導的な働きをしている人は、いつも信仰的にしっかりしていて、悩みも少ないと感じてしまわれるかもしれません。保証します、絶対にそんなことはありません！アサフは、自分が信仰から離れてしまいそうな心になった心を、73 篇で赤裸々に語っています。

背景は、彼が病に罹っているであろうことです。26 節を見ますと、「この身とこの心は尽き果てましょう。」とあります。主に仕えるアサフが、間もなく死を迎えようとしています。しかし、なぜ主に仕えているのにこのような目に会うのか？と悩みます。そして、主に仕えていないのに、全く健康に過ごしている人たちがいる、と思います。正しい人に悪いことが降りかかり、悪者が栄えているという矛盾を見るのです。

私たちが信仰を持ったら、かえって状況が悪くなったということがあります。また霊的に奮起して主に仕えようと思った途端に、続けざまに悪いことが起こります。そして、主に仕えることをやめるとします。教会に来ない、信仰からも遠ざかった、そのような時にかえって問題なく生活を営んでいます。このようなことが、現実としてしばしば起こるのです。その時に、私たちは「だったら、主に仕えることの意味は何なのか？」という疑問を抱いてしまうのです。その問題にアサフはぶち当たりました。

### 1A 聖所に入る前 1-16

1B 慈しみ深い神 1

1 まことに神は、イスラエルに、心のきよい人たちに、いつくしみ深い。

アサフがこれから、自分の歩みが滑ってしまったことを告白します。けれども、その前にアサフを救った根本理解がありました。それは、「まことに神は、..いつくしみ深い。」ということです。「いつくしみ深い」というのは、ヘブル語で「トブ」です、英語の good です。主が良い方であること、この根本理解が彼にあったので、彼は主のところに戻ることができました。

私たちには、自分たちには理解できないことが起こります。人が突然、病気にかかったり、交通事故にあたり、何かのトラブルに巻き込まれたり、「主よ、どうしてこのことをお許しになられたのですか？」と訴えたくになります。しかし、牧者チャック・スミスの言葉を引用したいと思います。「自分に理解できないことが起こったら、理解できるところに戻りなさい。」理解できるのは、主は良い方だということです。主は、神を愛する者たちのために、すべてのことを働かせて益としてくださいます。主は、愛ではない動機で物事を行われません。主は義なる方です。このようにして、自分の理解しているところに戻るのであります。愚かなことは、理解できないことのために、理解していることまでも捨ててしまうことです。今、目にしている悲劇は何でそうなっているのか理解できていないのに、既に理解できていることを放棄してしまうのは大変残念です。主が慈しみ深い方なのだ、良い方なのだという真理を絶対に捨てないでください。

## 2B 悪者の栄え 2-12

2 しかし、私自身は、この足がたわみそうで、私の歩みは、すべるばかりだった。3 それは、私が誇り高ぶる者をねたみ、悪者の栄えるのを見たからである。4 彼らの死には、苦痛がなく、彼らのからだは、あぶらぎっているからだ。5 人々が苦勞するとき、彼らはそうではなく、ほかの人のようには打たれない。

今、アサフは主を礼拝している心の清さが、失われてしまっています。心が、この世にある世界に魅かれています。悪者の栄えを妬んでしまっているのです。「悪者」というのは、ドラマに出てくるような悪人のことではなく、「神はいない、自分でやっていくことができる」とする人たちのことです。あるいは、「神はいても、私に何かできる訳ではないし。」とと思っている人たちのことです。そのような生き方をしていたら、大変なことになると言いたいのですが、ところが何の問題もないかのように見えています。彼らは健康上において、問題を持っていないようです。そして悪を行なっていれば、何らかの苦勞があつてしかるべきだと思うのですが、必ずしもそうなっていないのです。そして、その行ないのゆえに何らかの問題に巻き込まれたり、逮捕されたりすることもなさそうです。それで、どうしても妬んでしまうということです。

けれども、これらはサタンが作り出している虚像であります。テレビや雑誌、流行が作り出す虚像がたくさんありますね。例えば、離婚です。私はほとんどテレビを見ないのですが、あるドラマで女子高生のような若い女の子が、主人公の女性が離婚歴のあるのをしって、「カッコイイ」と言っているのを見ました。芸能人が、いろいろな男性と結婚して自由奔放に生きて、それが魅力あるように見えるから、そんなことを言っているのでしょう。とんでもないですね、聖書では「主は離婚を憎む」

とあります。一つにされたものを引き裂くことを、当事者は痛いほど分かっています。しかし、それは表には出てきません。むしろ美しく見えるのです。

73:6 それゆえ、高慢が彼らの首飾りとなり、暴虐の着物が彼らをおおっている。73:7 彼らの目は脂肪でふくらみ、心の思いはあふれ出る。73:8 彼らはあざけり、悪意をもって語り、高い所からしいたげを告げる。73:9 彼らはその口を天にすえ、その舌は地を歩き巡る。73:10 それゆえ、その民は、ここに帰り、豊かな水は、彼らによって飲み干された。

その人の語る口には力があるので、人々がその人によって支配されています。その人のしていること次第で、すべての物事が決められていきます。いじめも、この構造です。学校だけでなく、大人の社会にもたくさんあります。

73:11 こうして彼らは言う。「どうして神が知ろうか。いと高き方に知識があろうか。」73:12 見よ。悪者とは、このようなものだ。彼らはいつまでも安らかで、富を増している。

このように、神を度外視した生き方をしている、それでも安らかである。また生活も安定して、何ら問題がないように見えます。それに対して、自分はどうなのでしょう？

### 3B 空しい心の清め 13-16

13 確かに私は、むなしく心をきよめ、手を洗って、きよくしたのだ。14 私は一日中打たれどおしで、朝ごとに責められた。15 もしも私が、「このままを述べよう。」と言ったなら、確かに私は、あなたの子らの世代の者を裏切ったことだろう。16 私は、これを知ろうと思い巡らしたが、それは、私の目には、苦役であった。

「空しく手を清めている」と言っています。これは、礼拝をするために手を洗っていることです。主に對して礼拝をしている生活をしているのに、その報いを見ることができません。むしろ、信仰を守っているのに、些細なことにも罪意識を抱いて、苦しんでいます。あの時に付いてしまった嘘がある、と言って一日中悩んでいるのに、一日中嘘について平気な人が、会社では自分よりも先に昇進しています。自分に与えられている報いと言ったら、罪責感だけが増えたのではないかと感じるのです。

そしてアサフは、今のそのような言葉を他の信者たちに話すことをためらっています。それは、彼らにつまずきになってしまう、衝撃を与えてしまうと懸念したからです。いかがでしょうか、他の仲間の兄弟姉妹に、このことを告げてしまったらつまずかせてしまう、と懸念したことはないでしょうか？正直になることは大切ですが、正直すぎることによって、かえって人を傷つけてしまうこともあります。だから、アサフは黙っていました。

## 2A 聖所に入った後 17-28

こんな考えにアサフは囚われていました。しかし大きな転機が来ます。

### 1B 瞬く間の滅び 17-20

17 私は、神の聖所にはいり、ついに、彼らの最後を悟った。

アサフは、神の聖所の中に入りました。ここが、この詩篇の中心聖句です。神の聖所の中に入ることによって、物事の見方がすっかり変わります。イエス様が言われました。「からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が健全なら、あなたの全身が明るいが、もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。それなら、もしあなたのうちの光が暗ければ、その暗さはどんなでしょう。(マタイ 6:22-23)」自分が目で何を見ているかで、からだ全体がどうなっているか知ることができます。自分が見ているものが正しければ、全体に影響を与えます。それまでは、何とかしがみつこうようにして、礼拝に集っていたところが、儀式ではなく、神の御霊によって、真実な心で神に近づくことができました。すると、すべて見るものが変わったのです。

私たちはゆえに、礼拝を捧げる醍醐味があります。礼拝は賛美から始まります。説教が礼拝ではありません。祈りと賛美から始まり、献金を捧げ、報告を聞き、交読をし、そして説教です。賛美は、一人一人を主のご臨在の中に導く働きを行い、神の御言葉を聞く、開かれた心を整えます。

私たちは教会の礼拝を休むと、それだけで世の物質主義の大きな洪水の中で溺れてしまうことになります。一気に、見方がアサフのようになってしまい、神が見えなくなってしまうのです。ですから、私たちは主の元に来て、主が御霊によって自分の心の目を開いてくださるように待っています。「神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。(エペソ 1:17)」主が見ておられるように、見ることはできるのです。そしてアサフが見たものは、彼らの最後でありました。

18 まことに、あなたは彼らをすべりやすい所に置き、彼らを滅びに突き落とされます。19 まことに、彼らは、またたくまに滅ぼされ、突然の恐怖で滅ぼし尽くされましょう。20 目ざめの夢のように、主よ、あなたは、奮い立つとき、彼らの姿をさげすまれましょう。

アサフが滑りそうになっていましたが、実は本当に滑るのは彼ら自身だったのです。そして、彼らが瞬く間に滅ぼしつくされるのです。申命記でモーセがこう言いました。「32:35 彼らの足がすべるとき、／わたしはあだを返し、報いをするであろう。彼らの災の日は近く、／彼らの破滅は、／すみやかに来るであろう。(口語訳)」滑って、主から災いの報いを受けます。聖書によると、明確に、不信仰者は火と硫黄の池に投げ込まれることが定められています。「黙示 21:8 しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。」アメリ

力で第一次霊的覚醒が起こった時に、その火付となったのが、ジョナサン・エドワーズの「怒れる神の御手の中にある罪人」という題名の説教です。彼はこう言いました。「まだ回心していない人は、地獄の上にわたされた腐った板の上をあるいているようなものです。」地獄の火がすぐ下にあります。けれども、歩いている板は腐っていて、もう間もなく壊れてしまいます。もうすぐ、火と硫黄の池の中に投げ込まれるのです。

あるいは、この地上で突然の滅びが来ます。「主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。(2テサロニケ 5:2-3)」この世に、偽物の平和を持ってくる者がやって来ます。この人こそ世界に平和をもたらずと世界に受け入れられる人がきます。けれども、その人が世界の指導者に選ばれて、間もなくして自分の正体を現し、これまでにない恐ろしい患難が来ると聖書は預言しています。

ですから、アサフが見ていたものは、確かに目で見える事実であったでしょうが、それは半分の真実だったのです。一部しか見せていませんでした。この地上での生活だけです。けれども、その後の世界や、御霊による世界によって全体像が見えるのです。しばしば、信仰を持つと物事に対して盲目になるという人がいます。けれどもそれは正反対で、信仰を持たないから、目に見えない部分が見えないのです。

私が以前、あるクリスチャンのカップルの結婚式に招待された時のことです。披露宴で、何人かの人々が新婚夫婦への祝福の言葉を頼まれました。その全てが未信者の方でしたが、「末永くお幸せに」というものでした。私の番になりました。私は、こう言ったのです。「結婚生活は短いので、大事にしてください！」過激かもしれませんが、言わせてもらいました。それはその結婚が一年ぐらいで破局になるという意味ではありません。結婚生活を死ぬまで続けて、五十年ぐらいだとしましょう。それが末永くないのです。あっという間なのです。五十年経てば、後は死んで、死んだ後にイエスを信じる者は復活します。その時には結婚していません。御使いのようになっており、夫婦の関係は解消されています。ですから、短いのです。短いからこそ、その限られた時間を大事にするのです。これだけ、私たちは複眼的な目が与えられます。

## 2B 右手で支える主 21-26

21 私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺されたとき、22 私は、愚かで、わきまもなく、あなたの前で獣のようでした。

聖所に来るまでに自分の心を述懐しています。獣のようでした。獣と人の違いは、人は神の形に造られたものです。また、獣には霊がないですが、人には霊、スピリットがあります。ただ食べるために生きるではありません。もちろん生きるために食べますが、人はそれ以上の存在です。け

れども、この世の哲学はいかに自分が生きていくか、ということしか教えません。それは動物と同じ次元なのです。

23 しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりとつかまえられました。

すばらしいですね、そのような滑りそうな時であっても、主は実は自分をしっかりと掴んでおられました。共におられたのです。「砂の上の足跡(Footprints in the Sand)」という有名な詩がありません、読んでみます。

ある晩、男が夢をみていた。夢の中で彼は、神と並んで浜辺を歩いているのだった。そして空の向こうには、彼のこれまでの人生が映し出されては消えていった。どの場面でも、砂の上にはふたりの足跡が残されていた。ひとつは彼自身のもの、もうひとつは神のものだった。

人生のつい先ほどの場面が目の前から消えていくと、彼はふりかえり、砂の上の足跡を眺めた。すると彼の人生の道程には、ひとりの足跡しか残っていない場所が、いくつもあつた。しかもそれは、彼の人生の中でも、特につらく、悲しいときに起きているのだった。

すっかり悩んでしまった彼は、神にそのことをたずねてみた。「主よ、私があなたに従って生きると決めたとき、あなたはずっと私とともに歩いてくださるとおっしゃられた。しかし、私の人生のもっとも困難なときには、いつもひとりの足跡しか残っていないではありませんか。私が一番にあなたを必要としたときに、なぜあなたは私を見捨てられたのですか」

主は答えられた。「わが子よ。私の大切な子供よ。私はあなたを愛している。私はあなたを見捨てはしない。あなたの試練と苦しみの中に、ひとりの足跡しか残されていないのは、その時はわたしがあなたを背負って歩いていたのだ」

24 あなたは、私をさとして導き、後には栄光のうちに受け入れてくださいます。25 天では、あなたのほかに、だれを持つことができます。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。26 この身とこの心とは尽き果てましよう。しかし神はとこしえに私の心の岩、私の分の土地です。

そうです、アサフは自分の死ばかりを見つめるのではなく、死後の命をしっかりと見ることができました。そしてそこは主ご自身のおられる天であります。ですから、死んでも主と共にいることができますので、それは喜びなのです。「ピリピ 1:23 私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまっさいてい

ます。」

私たちの挙げる葬式は、キリスト者のものとそうでない人には、大きな開きがあります。キリスト教の葬儀には喜びがあります。その人が今、天にいるのだという明確な確信があるからです。あまりにも明確なので、私たちの中には喜びさえあります。しかも、生前、病の中で苦しんでいたのなら、その肉体から解放されて、今は新しい体を着せてもらっているのだと知ることができ、私たちは深く慰められるのです。

### 3B 主の近くにいる幸せ 27-28

そこでアサフは、結論を書きます。

27 それゆえ、見よ。あなたから遠く離れている者は滅びます。あなたはあなたに不誠実な者をみな滅ぼされます。28 しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語り上げましょう。

すばらしいですね、ここ 28 節の「しあわせ」という言葉は、同じく「トブ」、良いという言葉です。彼は神は良いという言葉から始めて、「神の近くにいることが、良い」という言葉で終わっています。主の近くにいることによって、これだけ私たちは見えないものが見えるようになります。サタンによって偽りの入っているこの世から免れ、正しい目で見ることができます。

どうやったら、目で見えないものが見えるようにして生きることができるのでしょうか？もう一度いいます、「神の聖所に入る」のです！イエス・キリストが流された血によって、心の良心が清められた人は、大胆に神のところに近づくことができます。信仰によって近づくことができます。しかし、それには悔い改めが必要です。光であられる神に近づくのですから、自分の闇を見せられます。けれども、そのあり方を捨てて、私は神に近づきますとするのです。神に近づかないで、滅ぶ者とはならず、慈しみ深い神のところに来てください。